新刊紹介

歴史哲學

三木　清著

時間がグリニッチ天文臺の時計と共に廻つてゐると考へられてゐたときと、すでにわれわれの時間の解釋が異つてゐる。かくして歴史も單なる年號表をもつて記錄づけられなくなつて來る。廣い意味の人間學がもたらす多くの變革の中で時間解釋の問題が最も興味を引くに足るものであらう。したがつて歴史の問題も亦そうである。

多くの民族、風土、時代によつて、空間に對する人間の解釋が異る樣に、時間の解釋が異なるとしたならば、歴史そのものが歴史の上に載せられてゐる。或は歴史の地理性及び歴史の歴史性が考察されて來る。人の謂ふ歴史的感覺とは、それ自身時間の中に於ける人間存在のシュテインムングに根ざしてゐる。音樂評論家マルクスがリズムに zus のリズムと hin のリズムがあると論じてゐるけれども、このリズムのもつ情趣的構造の中には時そのものへの人間的解釋が潜んでゐなければならない。光に光の人間的歴史がある樣に、音にも音そのものゝ歴史的類型がある。その根柢に深く根ざすものは、時間及空間の人間的型態的發展でなくてはならない。歴史の構造はその上に成立してゐると考へられやう。

「何故に我々は今日かくも多く且かくも全く相異つた歴史觀及社會學が互に激烈に爭つてゐるのを見るかの最も深い理由は、凡てこれ等の歴史觀の根柢には人間の本質、構造及び起原に關する根本的に相異る諸理念が存するといふことのうちに看取さるべきである。なぜなら各の歴史理論は、歴史家、社會學者または歴史哲學者にそれが意識され、理解されてゐると否とに拘はらず、一定の種類の人間學にその基礎を有するからである」と云ふシェーラーの考へ方は今世紀の歴史觀にとつては大きな標示であつた。著者はこの場合、「今日人間の本性に關する人々の意見の間に何等の統一も存しないのは、我々の社會が分裂し、その内部に激烈な諸對立が含まれてゐるところにひとつの重要な理由がある」ことをのべてその歴史觀を補はんと企てる。そこにシェーラーの歴史觀がすでに歴史的となりつゝある過程を見出すのである。

著者は第一章で歴史の概念を規定し、二、三、四、章で存在論的に歴史並に時間の解釋を施し、五章に於て史觀を、最後に總括的に歴史的認識の類型を顧みてゐる。それ等の中には種々の角度よりして極めて示唆的なるものが滿ちてゐる。著者の本誌に與へられたる最初の論文がすでに歴史の問題であつた。その時は西南學派のわが學界を風靡した頃であり、著者の立場も亦それであつた。彼此思ひ合せてそれ自ら「歴史的なるもの」の迫り來るを感ずる。

我々はつねに前に進み得るのでなく、また屢々新たに出發點へ立戻つて出直さねばならない。Stirb und werd! とは著者自らの此書に對する深い感慨でなくてはならない。

（紹介者、中井正一、岩波書店發行、壹圓五拾錢）